

中国山東省黄県人の商慣習

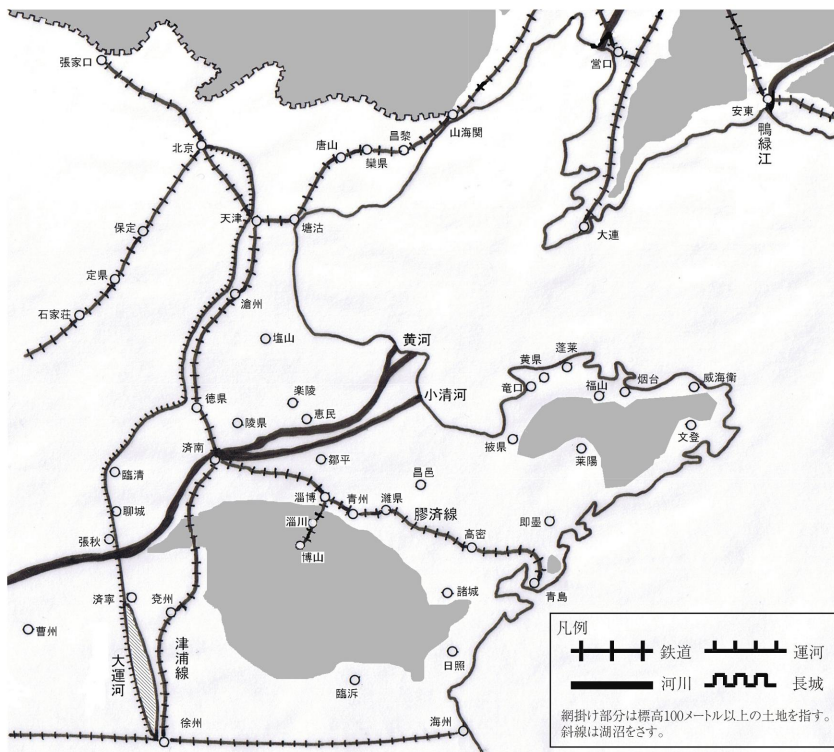
翻訳 蔣 惠 民
上 田 貴 子

中国山東省黄県人の商慣習

歴史的に山東半島の膠東地区「半島の東部」は三つの経済圏に分けられる。黄（現在の龍口市）・蓬萊・掖（現在の萊州市）は商業経済圏、棲霞・萊陽・萊西など内陸部は農業経済圏、威海・榮城・海陽・長島など沿海部は漁業経済圏である。商業経済圏の黄県人は商業をなりわいとしてきた長い歴史があり、本稿ではこれをとりあげて紹介したい。清代光緒年間の黄県城（図1）には三〇〇余の錢莊「両替商」や雜貨店があった。一九一四年に龍口港が外国に対して開かれ、一九一七年には中日合弁の龍口銀行ができ、一九二二年には輸出入総額は五九七・七七万関平兩となった。取引の発展により、飲食業、旅館業、理髪業などのサービス業が発展し、龍口には店舗が林立し、外地からの商人が集まり、「小上海」と呼ばれた。一九三七年には黄県の商家は二二一軒となり、県城の西関「街を取り囲む城壁の西の門」の通りだけでも一五七軒が軒をつらね、その規模と名声はかなりのものだった。彼らの取り扱う商品は広範にわたり、「綾絹・薄絹・縐子・緞子などの絹織物からネギ、ニラ、ショウガ、ニンニクに到るまでそろそろ」といわれ、「黄城一の繁華街」の誉れも高



▲図1 黄県城城壁



▲山東関連地域地図

かった。

一、黄県の位置

黄県は膠東半島の西北部、東経一二〇度一三分から一二〇度四四七分、北緯三七度二七分から三七度四七分。東は蓬萊県に隣接し、南は棲霞、招遠に接し、西と北は渤海となり、海を隔てて天津と大連を臨む。総面積は八四〇平方キロメートル、現在の人口は約六三万人である。昔から優秀な人物を排出し、人口も多く文明も発達し物産も豊かだったことが考古学によって明らかにされている。最も古い時代には東夷とよばれ、商代の終わりには「萊国」をたてた。紀元前五六七年には斉に滅ぼされ、

その版図となった。戦国時代の話術で有名な淳于髡、秦代の方士徐福、東呉の大将太史慈、明代の宰相范復粹、清代の大学士賈禎の故郷である。

清代の『黄県志』の記載には「領域内は人が多く土地が少ないため、多くの人間が四方に利益をもとめた」とある。黄県は京畿にも比較的近く、水陸交通の便があるという有利な地理的条件を備えていたため、華東地区、さらに中国東北三省の商業は黄県人の天下だった。黄県人は海外でも商業活動を行い、日本や東南アジア各国のみならず、大洋をこえたアメリカ・アフリカ・ヨーロッパ・オセアニアなどにも足跡がある。彼らは沈着老練で、変化に動じず、着実に物事をすすめ、「取引の盛んなさまは四海に通じ、財力の豊かさは三江に達する」と表現されるほどだった。その商業には伝統的な齐鲁文化の影響があり、特に孔子、孟子を代表とする儒教文化の影響が見られ、「誠信経商」「誠実な商い」、「重利更重義」「利を重んじる以上に義を重んじる」などの信条のもと発展をとげ、「魯商」の典型例となり、歴史上、黄県は全国でも著名な商業地となった。

二、東北三省での黄県人の商業

昔の黄県人は東北三省に商業に行くことを「闖関東」「東北へふみいる」といった。清朝政府は中国東北を「龍興之地」「皇室の故地」とし、山海関内の漢族が大量に移住し、旗人の利益を害し、満族の習俗と秩序を破壊することを心配した。康熙七年（一六六八）封禁政策を開始し、これ以降は東北へ行くことが禁じられた。当初は部分的な閉鎖であったが、やがて全面的に封鎖され、関をこえることや上陸を厳しくとりしめし、流民を追い出した。しかし流入禁止を厳しくしたにもかかわらず、山東省・河北省の農民は、生活苦や自然災害から逃れるために、海を越え長城を越えて、眠れる東北の沃野に大量に入り込んだ。清末には東北へ行った人間は一四〇〇万人以上と

なつたが、黄県だけでも毎年三〇〇〇人が東北へ行った。一八九九年日本人学者小越平隆がその著書『滿洲旅行記』善隣書院、一九〇一年に当時の状況を記録している。奉天から興京に至る道では夫が大八車を引いて、妻がその上に乗り、子供は泣いたり眠っていたりしている。夫が車を後から押し、弟が前を引くものもある。杖をついた老女や、寄り添いあつてよるめき歩く娘たちもいる。夫は妻をののしり、老母は子供たちを大きな声でよばわつている。人の隊列は通化、懷仁、海龍城、朝陽鎮へと連なつてゐる。奉天から吉林への途上で寢食を共にするものはみな山東からの移民だつた。破産した農民は禁令を省みず、幾千万もの危険を冒し清朝の故地へと「闖入していった」ため、この現象は「闖關東」とよばれた。

では、なぜ「闖關東」をしなければならなかつたのだらうか。黄県人が東北に行くのは、送地側の要因としては、生きる必要からだつた。この地域では人口は多いが土地が狭く、さらに天災人禍のために東北に行かざるをえなかつた。流入地側の要因としては、東北は生産力の点では劣り、未開墾地が多く、商業活動もまだ活発ではなく、経済的な成功の機会に満ちてゐた。黄県人が東北に行つて商業に従事した歴史は長く、故郷に送金するもの、財貨をもつて正月に帰郷するもの、豊かになり故郷に大邸宅を構えるものもあり、これらの刺激がさらに多くの黄県人をして東北に向かわせた。昔の黄県では村々、家々どこにでも東北に行つたものがおり、青年で東北にいかないものは見込みがないと思われることさえあり、闖關東が一つの習俗として形成された。往時の黄県では労働力に余裕があつた場合、あるいは天災人禍がおこつた場合、一家を連れて、あるいは親戚親友が集まつて、仕事をもつて東北に行くことが考えられた。

人は文化、情報を伝える媒体であり、人の流動は文化を伝える。中原文化、齊魯文化が東北地区に大規模に展開したことは、中原文化と齊魯文化の平面的移動といえる。華北と東三省は、言語、宗教信仰、風俗習慣、家族制度、倫理道德、経済行為などの各分野において、たいへんよく似てゐる。人の移動は地域間の境界を打ち破り、社

会・経済・文化の伝播、交流、融合を促進し、互いに補いあい、人口の増加を助長する。東北と関内「長城の内側」でも社会・経済・文化の調和と統一がすすみ、双方の商品往来や資源の補いあい、文化習俗の融合が進んだ。このように人口移動には大きな歴史的意義がある。

三、大阪華僑の故郷

黄県の商人には、日本に渡つたものも多く、一九九〇年の龍口市華僑辦公室の統計では三三一人に達している。その中でも大阪華僑の王汝鈞氏が最も有名である。黄県人の大阪での商業活動は天地人の利だけでなく、利用できるもの全てをよく利用している。彼らは主に飲食業に従事し、中華料理店が最も有名である。その料理の特徴はあっさりしており、素朴で、素材の味を生かし、口当たりよく、油をつかつていてもしつこくなく、品質を重視したものである。また、よりすぐりの材料を使い、質も高く、サービスもよい。信用の維持のためには損をすることもいとわず、その信用ゆえに大阪で地につけた安定した活動をしている。彼らが扱う魯菜は中国四大料理の一つである。魯菜の起源としては膠東の福山県が有名である。華僑の王汝鈞氏（一九〇三—一九九四）も中華料理店の経営で財をなした。出身は黄県桑島村で、一三歳の時に父親の王作嬴について大阪市の泰嬴楼で仕事を学んだ。二七歳にはオーナーに推薦されて二カ所の料理店の管理をするようになり、一九三五年には中華料理五色園など三カ所のレストランのマネージャーとなった。一九四五年には心齋橋に万楽天餐館を創業した。一九四六年には大阪市の南華会館の会長となり、一九五五年に中華学校を組織し、一九八二年には山東同郷会の会長も務めた。そのグループ企業は傘下に七つのレストランと、靴店一軒を擁した。商業界に身を置く王氏は中日友好事業にも大きな貢献をした。桑島―東瀛は一衣帯水、連理同根といえよう。一九九四年八月に王汝鈞氏は大阪で病没したが、彼は生

前、大阪を第二の故郷とみなしていた。いま、その子孫は大阪で若松飯店を経営している。

四、黄県商業活動における「坐商」の商習慣

黄県人の商業活動には古くから「行商」と「坐商」の区別がある。坐商は店舗を固定の場所に構えているものや、人の多いところを選んで屋台を設けて商業を行う、客待ちの商売である。黄県人が坐商をする場合は、まず東家「資本主」が出資して店舗を開設し、雇われた人間が経営を担当した。店には経理、掌櫃「マネージャー」や経営陣にあたる」が一人から三人、賑先生「会計にあたる」、伙計「店員にあたる」が数人おり、自炊設備があった。黄県人の習慣では、子供が片言をしゃべれるようになると年長者が九九を暗記させ、もう少し大きくなると私塾に行かせて四書五経を勉強させ、一三歳から一六歳になると、商業を学ぶために家から出した。その際、まず保証人をさがした。保証人は病や死亡した場合、飲む・打つ・買う・盗むなどの違法な行爲をした際に責任を負わねばならなかった。店に一旦入って、小伙計「伙計と同じ」となると、姓をまえにつけて、李伙計、張伙計などと呼ばれた。店のカウンターに立って商いをしている姿は、木に前掛けをくくりつけたようだといわれた。なぜなら商店の正面にはカウンターがあり、ちょうど人の腰の高さであったためである。頭もよいし仕事もでき、口がたつものは饗の穴から引き抜いてきたといわれた。小伙計の仕事はつらく、毎日早く起きて遅くまで寝れず、早朝に掌櫃の洗面用の水を用意し、痰つばを掃除し、地面を掃き、机を拭いた。夜には掌櫃の寝床を用意し、そろばんの練習をした。そろばんの練習の際には、賑先生がその日の帳簿の数字を読み上げ、もう一人がそろばんを持って計算し、小伙計はそろばんを手にして傍らにたって練習した。練習の際には六二五或いは一六八七五の数字をくりかえした。薬指と小指で銅貨を一枚握って、右手の親指人差し指中指でそろばんの珠をはじいた。時には、早朝の掃き掃除に

間に合うようにと、夜に箒を抱いて眠った。小伙計の食事と宿舍は店が負担し、報酬は毎月大洋銀三元で小麦粉一袋相当だった。満三年のちに賃金がはらわれるようになり、毎月大洋で八元ぐらいたった。さらに一年から五年の小額の賃金を過ぎると、花紅といわれ、年末に利潤を計算したあとの、東六西四（出資者六割、店舗四割）の原則に照らして分配された店舗の取り分の一〇%が小伙計達の分となり、残る九〇%は掌櫃のものとなった。一年に一度中間決算をし、三年に一度総決算をした。

商業をするには天秤が必要である。黄県では歴史的に商家では「十六両秤」と呼ばれる天秤が使われた（図2）。これも現代の天秤と同じで、さお、さら、おもりの三つの部分からなり、一〇斤、一五斤、三五斤などがあった。一斤が一六両からなっているので「十六両秤」といわれた。十六両秤のさおは紫檀の木でつくられ、一両ごとに一つの星がうたれて印となっていた。各斤一六両になるので、一斤が等しく一六に分けられて一六の星があり、これは南斗六星、北斗七星、福、禄、寿の三星を示していた（図3）。南斗六星すなわち斗宿は二十八宿の一つで玄武宿の第一宿で六つの星からなる。北斗星は北天にある斗（あるいは柄杓）の形になった七つの星で、その星の名称は天枢、天璇、天璣、天權、玉衡、開陽、搖光という。南斗六星と北斗七星さらに福、禄、寿の三星を加えて一六星としている。



▲図2 十六両秤



▲図3 十六両秤の星

このような意味がこめられた十六両秤には商売上の格言が込められている。例えば、売り手にとつては、売る商品の重さを一両を少なくみつめることは寿星を捨てることを意味し、寿命を短くする。二両少なくみつめれば寿星と禄星を捨てることになり、長生きできないだけでなく俸禄も減ることを意味する。三両少なくすれば、三つの星全てを捨てることになり、福がなく、財もなく、寿命も短い一生を意味する。これに対して、逆に一両増やせば長生きし、二両増やせば禄が増え、三両増やせば福禄寿全てが増える。このように商人は商売において、何を捨てて何をとるか、福か禍か、全て自分の良心によるところとされた。「十六両秤」は誠実を基本とする価値を表し、黄県人はこの秤を使い、取引の規範とした。

一斤を一六両とするために、商品を売るに際し、小伏計は一両から一五両までの価格を暗記していなければならなかった。たとえばある商品が一元で一斤だとすると、一両は六分二厘五となる。二両は一角二分五となり、暗記のための決まり文句ができた。一両六二五、二両一二五、三両一八七五、四両二五、五両三一二五、六両三七五、七両四三七五、八両五、九両五六二五、一〇両六二五、一一両六八七五、一二両七五、一三両八二五、一四両八七五、一五両九三七五、規則的に六二五ずつ加えることになる。一ダースは一二であるから、一から一一までの価格も同様に小伏計は暗記しなければならなかった。一元で一ダースの商品をもとに決まり文句がつくられた。一個は八三三、二個は二六六、三個は二五、四個は三三三、五個は四一六、六個は五、七個は五八三、八個は六六六、九個は七五、一〇個は八三三、一一個は九一六で八三三ずつ加えればよい。

値段をはつきり示し、老人子供を欺かない。これは黄県商人が重視した商売の旗幟である。同時に、各商店には暗号がありその店ごとの秘密だった。暗号は文字を数字にかえたものである。例えば、元亨利貞天玄黄は、一・二・三・四・五・六・七・八を表示しており、元貞の二字は二元四角を表す。また甲乙丙丁、子丑寅卯、あるいは平安幸福、恭喜發財など、どれも文字によつて数字を表し、現在のパスワードや、電報の送信などのように、

入荷出荷商品に対し、その店の商業暗号を用いた。黄県の各商号が常用する商用の暗号はだいたい一〇個の文字からなつた。天地光時音律政宝畿重の一〇文字は一・二・三・四・五・六・七・八・九・一〇の数字を表した。その由来は次のようなものである。天は一、最大のものである。地はこれに次ぎ二、光の三とは、日月星をさす。時の四とは春、夏、秋、冬をさし、音が五をさすのは、古代の音階に宮、商、角、徵、羽の五段階があるからであり、律「リズム」が六をさすのは、黄鍾、土簇、蕤賓、夷則、無射など六つの楽器からである。政は七を表し日月火水木金土の七星をさす。宝は八を表し、ベンケイソウやサソリグサなど八種類の多年生多肉植物からである。畿は九を表し、先秦時代の行政区分に甸、量、采、衛、蛮、蠻、鎮、范などの九畿があつたことによる。重は一〇を表し、重複を意味しており、数が重なることをいう。九に一を加えて一〇となり、満たされることを意味して一〇をあらわす。

五、黄県の商業における「行商」

行商は資本規模が小さく、天秤棒をかつぎ、車をひいての流しの販売業で、商品を持つて各戸をまわるものである。彼らは広い農村地帯で活躍し、村民からは「拉郷」と呼ばれた。往時の農村は自給自足の自然経済が基本で、商品の交換はあまり発達していなかつた。坐商の店舗や屋台や職人の工房の多くは人口の密集した都市や比較的大きな集鎮に集中していた。農村での取引は小規模資本の行商に全面的に頼つていた。これらの行商人は村をまわり、家々をまわり商品をとどけたのである。行商も二つのタイプにわけることができる。ひとつは物を売り買ひするもの、もう一つは手仕事で修理や器物の加工をする職人である。往時には人々は「做小売買的（小商い）」「要手芸的（手仕事）」とよんでいた。業種は多く、農村の生産生活のあらゆるジャンルにわたつた。よく見かけたのは

日用品の売り子、油売り、食品売り、廃品買取りである。手仕事を生業とするものでは、ブリキ職人、鑄掛師、茶碗継ぎ、染色師、石工、網師などである。これらは農村の人々にとっては不可欠の存在で、敬愛の対象だった。荷を担いで行商は一生農村を歩き回って苦勞をし、広い地域の人々にサービスを提供する仕事だった。行商には坐商に比べると以下のような違いがあった。

(一) 客をつかまえる独特の方法。坐商ならば店名や業種を書いた看板という、有形の広告を使うが、彼らは村々街々を歩きながら声をあげて販売し、扱う商品の名をよばわって客をひきつけた。

(二) 物々交換。昔の農村では、貨幣の流通量が少なく、行商人は錢での取引もしたが、物々交換での取引もした。つまり、商品を渡して必要な物をもらったり、仕事をたのんだりした。

行商ではこのようなプリミティブな交換が行われていたが、農村の人々の便宜になっただけでなく、農村の文化や生活にも影響を与えた。芸能としては『貨郎與村姑(物売りと村娘)』『鋸大甕(大甕をつぐ)』『錮漏匠與王大娘(鑄掛師と王おばさん)』などの題名の芝居がある。また京劇『紅灯記』には刃物砥ぎが「はさみを砥ぐよ、包丁を砥ぐよ」とよばれる姿が描かれている。これらの行商人は一九五〇年代には産業の発展にともなう社会の変化によって、昔ながらの行商という農村で常態だった取引は次第に姿を消し、現代的なものにとっかわられてしまった。

六、黄県人の商業成功者

黄県の商人のうちで最も成功したのは、黄県城の丁氏一族である。六〇〇年の発展の歴史の中で最も栄えた時期はちょうど清朝期にあたる。中華民国時代の『黄県志』の記載は「丁氏は先祖代々勤勉で儉約にはげみ、家を興し

商売によつて豊かになつたが、豊かになつても吝嗇であつてはいけないという家訓があつた。そのため山東で富豪といへば、徳望からいつても丁氏である」といわれた。筆者は十余年の研究から誠実なビジネス思想の下で、儒者、役人、商人の三つがむすびついたことで丁氏が大いに発展したことを明らかにした。

丁氏の發展ぶりはどのようなものだったのだろうか。丁家に伝えられるところによれば、一四一〇年に丁氏の夫人黎氏が飢饉を逃れて黄県城にやつてきた。彼女には幼い息子があつたが、これを雑貨店の店先において、自分は物乞いをしていた。ある日、その子供が店先で遊んでいるのを見て、雑貨店の店主が口数は少ないが幼いながらもしっかりした顔だと思ひ、子供を試してみようと思ひ立つた。店主が銅錢を一枚投げると、銅錢は子供の足元に落ちた。子供はこれをひろつて店のカウンターに持ってきた。店主はこれだけではなんともいえないと思ひ、さらに一掴みの銅錢を投げたところ、子供は一枚一枚拾つてカウンターに持ってきた。店主は幼いながらも高潔な人柄に内心感心した。その日の夕食後に店主は母子を店に呼んだ。「あなたたち母子がそんな生活をしているのはかわいそうだ。この店はそんなに大きくはないが二間あるから、一つをあなたに貸してあげるの、食へ物屋をやつて稼ぎ、家賃をはらつてくれればよい。まずは貸しておくから。子供はうちの店で小傭計をしてはどうか。」黎氏は店主の真心にひざまずいて感謝した。そして彼女は小さな食堂を開き、粟粥、焼餅を売り、子供は雑貨店の販売員となつた。このようにして母子はその誠実さから、やさしい店主のもとに身を寄せることになつた。数年後、母子は雑貨店主の老後の世話をしてその死をみとり、経営を拡大した。その子孫たちは當舖(質屋)を経営し、まじめに働いて家を維持し、財を増やし、「儒」[学者]・官「役人」・商「商人」という生業の連携によつて家を發展させた。清代乾隆年間の一代目丁元沂の時には山東一の富豪となり丁百万と呼ばれた。

丁家の主なビジネスは當舖である。古代の商業区分では「典当」「押店」ともいわれた。當舖は明清時代に盛んになつた業種で、主な業務は五つある。第一が典当「質屋」である。質草は宝石装飾品、衣服や皮革などで、店は月

ぎめで利息をとった。商品の価格の五割から七割が質入れ価格となった。質入れ期間は短くて一ヶ月、長くて二年である。期限がきても質から出せないときは「死当（質流れ）」となって競売にかけられた。第二は預金である。貨棧「倉庫業」や商社、商店、大家族の収入をあずかった。第三は為替業務、第四は金銭や糧食の貸付業務だった。金や穀物を提供するには保証人が必要とし、土地を担保にして契約を結び、月ぎめの利息を必要とし、期限どおりに返済しなければならなかった。第五は兌換である。つまり銀元と銅銭の交換、銅銭と銀元の交換による価格差を利益とした。典当の業務とは、急に金が必要となった者が、品物を當舖に持ち込んで担保として金を融通してもらうものである。質入れが成立すると、質草に対して「当票」という証明に抵当の価格を明記して客に渡した。期限がきたものは當舖が没収した。質押さえされた物の五〇%の価格が當舖の手に入る仕組みとなっていた。當舖のもう一つの特徴として、客との間の合意を尊重し、強制的な売買はしなかった。丁家はこのような當舖業によって蓄財した。丁家の當舖の数は数百箇所と多く、中国東部の一一省市にあまねく分布し、全国的な當舖のネットワークを形成していた。かつて抵当としたものには象牙の涼席（烟台市博物館蔵）、禹谿（泉屋博物館蔵）、頌壺（中国国家博物館蔵）、頌簋（山東省博物館蔵）など数十件の国家一级文物があった。當舖を代表としてその下に各分家の堂号が一〇〇近くあり、丁家の人々は北京に行くにあたっても旅館に泊まる必要はなく、自分たちの一族の店に泊まりながら北京に着くことができた。その資産は五四〇〇万両に達し、清朝政府の一年分の財政収入に匹敵した。

民国『黄県志』に記載された丁氏は「おおむね代々勤勉に働いて家を盛り立て、商業を行い、その発展は商業に はじまり商業に至る」商業によって家を興すものは多いが、財力をもって社会の中核となったことにより、家は数百年にわたって続いている」と説明され、商業が丁家の経済の重要な部分であることがわかる。伝えるところによれば、各地の當舖の業績がよい頃には、毎日五台の馬車が銀を運び、一日一斗の金が入るといわれ、このような情

況が数百年続いたという。丁家には八つの分家の屋号があり、これを八大錢袋といった。文来、泰来、信来、正誼、金城、東悦来、西悦来、天記などの分家の豪華な建築が黄県城の大半を占め、三千余間に達した。現存する建物は五五棟二四三室、濃厚な北京の府第様式の特徴をもちつつ、膠東の民衆住宅の雰囲気も併せもち、民間建築芸術の粹といわれる。膠東では「黄県房、棲霞糧、蓬萊淨出好姑娘」と歌われ、「黄県房」とは丁氏の建築のことである。丁家の當舖は分家ごとに統一管理がなされ、各地の當舖も黄県から職人を派遣して建物を建てさせ、構造は基本的には同じである。膠南市の王台鎮には丁家當舖の建物が一〇〇余間現存しており、保存状態も比較的よい。丁家のビジネスはほかの業種にも及んだ。たとえば黄県の登仁寿药局、魚市街南側文来の繰絲工場、烟台の「元豊祥」石炭商、濟南四馬路経七路の「豊華」石油会社、北京の多くの糧行など広範囲にわたった。どんな商売をしようとも、丁家は「誠信」の二文字を追求し、交際を大事にして榮え、後世に続く堅実な經濟基盤を残した。

このほかに、清代から民国にかけて、黄県では著名な商人を輩出している。单文興・单文利・紀鳳台・紀木新・李子初などである。

七、黄県人の商業の特徴

昔の黄県人の商業と特徴は以下のようにまとめることができる。

(一) 誠実な商売をむねとし、俗に「人身は天秤と同じ、何ごとも良心に基づき、よい仕事をしようと思えば、信用を宝とせよ」といった。品質を重視し、商品に正当な価格をつけ、老人子供を欺かないという商業道徳と信用を追求した。そのため親切で質実な黄県人から騙される心配はない。黄県人についてのある描写には、素直で寛容、質素で誠実率直、さっぱりしていて、親切とある。昔の黄県人が自ら言うようなこのような「実直」な性格は

現在に受け継がれている。

(二) 黄県人は親切で素朴で豪快誠実である。「商いの道は人の道である。人脈は財脈である」といい、「地道な商い」を追求し、第一に人の縁、第二に信用といい、「和をもって貴し」、「仲のよいことが財を生む」としている。商品が店に持ち込まれた際に、その品質が悪かった場合は、やんわりと丁寧に拒絶し、相手に快く帰ってもらい、その後もその客とのつきあいをすることを軽んじない。これは他の地域の商人たちとは違うところである。

(三) 利用できるものなんでも充分に利用する。もちろん天の時、地の利、人の和は彼らの商いに必須のものである。借金の取立ての際には第一に情けをかけること(情にもろいこと)を忌み、第二にものごとに疎いこと(相手が嘘を言っても信じるようなこと)を忌み、第三に気弱(相手に脅されること)を忌んで、『孫子兵法』を商業に持ち込んだ。

(四) 苦勞をいとわず、「天、地に頼るよりも、自分の力に頼ることを第一とする」ことを信条としている。苦勞すること、苦勞を元手とし、苦勞を光榮とし、苦勞を榮しみとし、一步一步地に足をつけて奮闘してきた。この苦勞をいとわない特徴は自然環境によって磨き上げられただけでなく、孔子孟子の精神を教えとし模範としていることによる。

(五) 利を重んじる以上に義を重んじ、友だちがいのあるつき合いをする。誠実であることを基本とし、まず良心にそむかず、次に友人に顔向けできないことをしない。俗に河北は追剥を出し、東北は土匪をだし、山東は好漢を出すという。昔の黄県人は「山東は好漢を出す」ということばどおり、義氣を重んじ、同郷の情を重んじ、友人のためならば両脇に刀を突き立てることもいとわない。義の基本的な意味は、第一に友人に忠であり、生死をともし、艱難をともし、約束を必ず守る。第二に義侠心に基づいて行動し、危機を助け、不正にあつているのをみれば刀を抜いて助ける。まさに『好漢歌』に歌われるままに、路上に不正を見れば声をあげ、助けるべきときには

手を出し、全国を渡り歩く。この点は、南方人がもてなし上手に見えて、実際は利を重んじ、銭を重んじ、なんとかして相手に金を出させようとするのとは大きな違いがある。

(一六) 仕事の話をするには酒が必要で、酒なしで話もりあがらない。この点は東北人と似たところで、東北商人は驚くほど酒を飲むが、酒が飲めなければ商業界には身をおくことができない。

同時に、彼らは故郷を尊重し愛している。外地に居るのは、ただ金儲けのためであり、故郷に必ず家をたて、幸福になつてもその先祖を忘れず、家のことを忘れず、祖先の名を挙げる。たとえば黄県城内の丁氏故宅、海岱鎮の王氏故居などがその例である。また、膠東地区の農業経済圏の人々が、農閑期を利用して商業経済圏の商店主のもとで働き、商店主から小額の金銭をもらうという形で生活を補いあつている。商業史という点からみると、黄県人の商業は晋商「山西省人」や徽商「安徽商人」に劣らず、各地で活躍し、その誠実さをもつて全国に名を馳せている。

最後に、黄県人の商業を山西省の晋商、両淮の徽商と比べてみよう。その経営には共通する部分と違う部分があり、以下の六点にまとめられる。

第一に地域である。晋商の主な活動範囲は山西省西部から山西省北部、内蒙古以北の地域にひろがつている。徽商は主に両淮、江浙と長江中流下流、時には運河や海路によつて北上し北京天津地区にも及ぶ。黄県人は主に海路で東北三省に、陸路で北京天津地区とその周辺に広がっており、南は江浙、西は山西省に達する。

第二に経営内容である。晋商は票号を中心とし、北方で必要とされる糧、棉、塩、茶葉なども扱う。関公「関羽」の「義」をもつて活動地に会馆を建て幫「同郷集団」を形成している。山東省聊城の山陝会馆は山西と陝西両省の商人が建てたものである。徽商は文化を尊び、儒にして商という、商人でありながら儒学をよく学ぶという特徴をもつ。銭荘を中心とし、塩、茶、木綿、絹糸、糧食を扱い、大きな利益をあげた。徽商は園林別荘と戯楼を好

んで建て、文人的な交友を好む。黄県人は絲房、當舖の経営を中心に、錢莊、糧行、葯房、紡績、石炭、石油などを扱うが、その経営範囲は他に比べて広い。

第三に経営理念である。晋商は錢を重んじるが、役人は重んじず、「商業に勝る学びはない」とし、小さい頃から子供たちにどのようなようにお金を儲けるかを教えている。徽商は役人を重んじ錢を重視しない。金儲けも役人になるため、小さい頃から役人になるために教育をうけ、政府内での成功を期待している。黄県人は中国に伝統的な「仕えることに勝る学びはない」という儒家思想をうけつぎ、小さい頃から子供たちに学問・商売・仕官のための教育をほどこし、君臣親子の間の忠孝節義を重んじる。また晋商や徽商の長所も吸収し、誠実に商売を行い、城壁や文廟「孔子廟」の修理や書院の建設、賑恤や団練の組織などの公共事業を通じて、民心を集め政府の賞賛を得てきた。

第四に経営方法である。晋商は小をもって大に勝るとし、往々にして小規模な商いから身を起こして、綿密に計画をたてて、資本蓄積を行い、安定的体系的に成長していった。徽商はタイミングを重視し、巧みに投機を行い、お互いに協力して商幫を形成した。規模の大きなものは政府とも関係をもち、大きな利益をあげた。貧しいものから金持ちまで豊かであることを誇りたがった。商業界で活躍しているにもかかわらず、自分が主役になり、相手を引き立て役にまわす。黄県人のように落ちついて、変化に動じずに着実に物事を進めるといふ点とは大きな違いがある。

第五に別離に対する態度である。晋商と徽商は別れを軽視する傾向がある。商売で一旦故郷を出ると三年か五年、長ければ二、三〇年も帰らない。しかし黄県人は故郷や家族への思いが強く、外地に出て仕事をしていても長年帰らずにいるというものは少ない。晋商は長期にわたって外地に住んでおり、これでは結婚しても不幸である。徽商は贅沢で、多くの妻妾をかかえている。それに対して黄県人は家の教育が厳しく家を重視する。

第六に、中国では晋商、徽商、黄県人にかかわらず、伝統文化と商業文化において、多くの類似点もある。たとえば文化教育、芸術的な品位をもとに重視している。「親族の誼を重んじ、世代間の関係を重視する」という宗族観念があり、「男性は勤労を尊び、女性は貞節を尊ぶ」という考えを第一とする。敬業精神や商業道德観念は正統な儒教思想を基礎としている。この点は共通するところといえる。

ここでは黄県人の商業習慣を紹介したが、現在、経済的に発展しつつあるこの地の商業の歴史はさらに研究を深めるに値するものであるといえる。

参考資料

- 『龍口市志』 齊魯書社、一九九五年
- 『福山区志』 齊魯書社、一九九〇年
- 『棲霞県志』 齊魯書社、一九九〇年
- 『日照市志』 齊魯書社、一九九四年
- 『萊陽市志』 齊魯書社、一九九五年
- 『威海市志』 齊魯書社、一九八六年
- 『萊州市志』 齊魯書社、一九九六年
- 『文登市志』 齊魯書社、一九九六年
- 『海陽県志』 齊魯書社、一九九八年
- 李大民、周舒光「抗戦前的水集工商业」(『莱西文史資料』第三集所収)
- 『民国黄県志』 一九三六年

本稿は山東省龍口市博物館館長蔣惠民氏による、龍口市における商業慣習を紹介したものである。二〇〇七年二月一六日神戸中華総商會會議室にて「東北アジア華僑のなかの山東幫」と題した研究会（平成一九年度科学研究費補助金（若手研究B）「近代東北アジアにおける中国系移民の受容と排除」による）を行った際に、報告されたものである。

本文中「」内は訳者による補足である。